

《新刊紹介》

John A. North and Simon R.F. Price, *Oxford Readings in Classical Studies: The Religious History of the Roman Empire: Pagans, Jews, and Christians*

Oxford:Oxford University Press, 2011, pp. 577.

藤 井 崇

本書は、おもにここ 15 年の間に発表されたローマ帝国の宗教に関わる論文のなかで、学界にエボック・メイキングな貢献をした 17 編を集めた論文集である。編者は、ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジの名誉教授である John North と、オクスフォード大学レディーマーガレットホールの名誉フェローであった Simon Price (2011 年に死去) である。両名ともに、英国を代表するローマ宗教史家といってよいだろう。全 17 編の論文のうち、7 編はもともフランス語、ドイツ語、イタリア語で発表されたものだが、本書ではすべて英語に翻訳されている。本文中のギリシア語、ラテン語のテキストには、できうる限り英訳が付されており、さらに訳注も過度の専門性を排した初学者にもわかりやすい形式で書かれ、本書の対象である学部学生に配慮の行き届いた編集になっている。無論、専門家にとっても、ローマ宗教史の一級の「目利き」が編んだ本書は、近年の研究状況を概観するためのきわめて有益なツールだろう。約半数の論文には、論文の著者による後記 (Afterword) が付され、その後の研究の展開や論文の批判者にたいする再批判などを手際よく把握することができる。本書の構成は以下の通り。末尾の括弧内は初出年を表している。

John North and Simon Price 「イントロダクション」

第 1 部「宗教生活の変化：ローマの宗教と都市の宗教」

1. Jörg Rüpke 「ローマの宗教と帝国の宗教：方法論をめぐる考察」(1997)
2. Richard Gordon 「ローマの皇帝崇拝と権力の問題」(2001)
3. J.B. Rives 「ローマ法における魔術：犯罪を再構成する」(2003)
4. William Van Andringa 「新たな結合，新たな地位：ローマ時代ガリアの都市の宗教世界と土着の神々」(2006)
5. Nicole Belayche 「ヒュプシストス：ギリシア・ローマ多神教においていかに神々を称えるか」(2005)

6. Andreas Bendlin 「予言の利害について：第2次ソフィスト運動期における神託とその文学的表現」(2006)

第2部「選択宗教」

7. Simon Price 「ローマの宗教の均質性と多様性」(2003)
8. Giulia Sfameni Gasparro 「密儀と東方宗教：宗教史の一問題」(2006)
9. Richard Gordon 「ミトラス教における儀礼とヒエラルキー」(2001)
10. John Scheid 「コミュニティとコミュニティ：ローマ期エジプトの Thiasoi に基づく考察」(2003)

第3部「宗教の共存：古い宗教と新しい宗教」

11. Philip Harland 「ディアスポラにおける文化変容とアイデンティティ：ヒエラポリスのあるユダヤ人家族と「異教」の組合」(2006)
12. Martin Goodman 「ヨセフスと1世紀ユダヤ教における多様性」(2000)
13. Judith Lieu 「キリスト教アイデンティティの形成と『ディオグネトゥスへの手紙』」(1998)
14. Guy G. Stroumsa 「清めと不満足：洗礼を拒否するマニ」(1999)
15. J.A. North 「異教徒，多神教徒，振子」(2005)

第4部「古代末期」

16. Averil Cameron 「初期キリスト教と女性の欲望をめぐる言説」(1994)
17. Peter Brown 「古代末期において聖人を楽しむこと」(2000)

末尾には論文の初出一覧と Further Reading, 索引が備えられている。

North と Price はイントロダクションにおいて、近年のローマ宗教史の研究動向を手際よく5つのポイントにまとめている。これは、収録論文の主張とも重なる部分が多いので、以下に要約しておきたい。

1. アウグストゥス以降、異教は衰退したとされてきたが、現在ではむしろ帝政期にもその活力を維持し、独創性さえをも備えていたと考えられている。これは、ギリシア語圏でもラテン語圏でも確認される現象である。

2. イタリア半島外の異教の発展に関して、ローマの影響の程度、土着の伝統の残存状況、そして両者の混交のあり方が再検討されている。

3. 多様な選択宗教（一つの教義を選択して入信する宗教）が議論の対象となっている。異教では、ミトラス教やその他の密儀宗教、異教以外ではキリスト教、マニ教、そしてユダヤ教内に存在した様々なグループである。

4. 1-3 世紀におけるキリスト教では、後の時代にみられるような唯一の支配的な教義はなく、様々な形態のキリスト教が共存していたと考えられるようになってきている。

5. 異教の多様な儀礼を、「異教信仰」とでも呼ぶべき単一の宗教と捉える意識は、他の宗教共同体との競合の結果、比較的遅くに生じたものに過ぎない。

イントロダクションの後、上に列挙した 17 編の論文が続く。各論文は、個別事例に即した具体的なものから、俯瞰的な立場から宗教を論じる理論的なものまで、それぞれ特徴があるが、多かれ少なかれ上記の研究動向を共有しているといっていよう。本紹介では編者自身の手になる論文 2 編と、評者が特に関心を持った 2 編、計 4 編をサンプルとして比較的詳しく紹介したい。

編者の North と Price の論文は、大所高所から異教と選択宗教（特にキリスト教）との関係を考察するかなり理論的な作品である。まず North 論文（第 15 論文）は、研究史における異教の位置づけにみられる矛盾（古典古代の異教では現代キリスト教との相違点が強調され、古代末期の異教では当時のキリスト教との共通点が注目される）から出発し、異教からキリスト教へという単純な発展史観に疑問を投げかける。その際 North が依拠するのは、18 世紀の思想家 David Hume が主張した、古代宗教の発展のダイナミズムを異教と一神教との間の振子運動と捉える考え方である。Martin West が明らかにしたように、アルカイック期以降、異教には常に一神教的要素（いわゆる pagan monotheism）が存在していたが、Hume はこの一神教的要素と多神教的要素との間の振子のような「流入と還流」こそが、合理的一神教を支持する知識人と身近な神々の加護を求める大衆を包括しうる異教を担保していたと考えたのである。North は、「一神教」、「多神教」という用語の持つ危険性に注意を促しながらも、Hume の振子説を下敷きとして、特に哲学分野における一神教的要素が、多数の神々にたいする個々の崇拝を前提としながらも神々の総合体を志向できる異教の体系を支えたと結論づけている。ただし、この「振子」のダイナミズムは、古代末期ではむしろ異教の弱みとなっていく。新興のキリスト教徒が、「異教徒＝多神教徒」というレトリックを確立してしまうと、異教の持つ一神教的強みは効力を失い、むしろキリスト教につけこまれる弱みに転化したのである。

Price 論文（第 7 論文）は、帝政期のローマ市における宗教生活、宗教アイデンティティを題材としながら、宗教集団における排他性の問題を考察する。ローマ市には、皇帝を頂点とする公式宗教、民族集団（ユダヤ人やパルミユラ人など）を基盤とする宗教、そしてその

他にも数多くの宗教が存在していた。なかでも、ミトラス教、マグナ・マテル崇拝、イシス崇拝、ユピテル・ドリケヌス崇拝などのいわゆる「東方宗教」が盛んにおこなわれていた（ローマ市にはミトラス教の聖所が25ヶ所ほど確認されている）。ただし Price は、これら「東方宗教」の痕跡が広くローマ帝国全域にわたっていること、また逆にいくつかの宗教ではその生誕地とされる東方地域で遺跡がみつからないことから、「東方宗教」という用語の使用には慎重である。ともかく、これらの「東方宗教」は、その密儀的性格から非信者にたいして排他的であったと連想されがちだが、これは事実ではない。マグナ・マテル崇拝やイシス崇拝では、去勢や剃髪といった明確な身体的特徴を持つ神官が奉仕していたため、確かに高度の排他性が確認できるが、他方で、イシス崇拝を除いて多くの「東方宗教」の神域には伝統的異教の要素（オリュポスの神々の神像など）も色濃く存在していたのである。同一の人物が、複数の宗教集団に属することも可能だった。同じくキリスト教やユダヤ教も、完全なる排他性を有していたわけではない。Price は、このように明確な核と境界線を持たない宗教アイデンティティを、クラスター（房、群れ）という概念で捉えようとする。これは、一定程度の共通認識を持ちながらも、流動性を備えたアイデンティティという意味だろう。一方、諸宗教における男性優位というジェンダー面での排他性には、そこまでの流動性はなかった。無論、イシス崇拝、ユダヤ教、キリスト教には、伝統的異教以上に女性が参加していたが、それにも限界があった。これらの選択宗教で革新的だったのは、女性の参加者数ではなく、むしろ女性と男性とが構成員として混在している状況そのものだったのである。

次に、評者の個人的関心から選んだ2編、Belayche 論文（第5論文）と Bendlin 論文（第6論文）を紹介しよう。両論文とも、帝政期ギリシア語圏の異教を扱っている。まず、Belayche 論文は、紀元前2世紀から紀元4世紀まで東方ギリシア語圏を中心にローマ帝国の広範囲に確認されるヒュプシストスという神のエピセツトを分析する。このヒュプシストスは、字義通りには「高みに住まう、高位の」という意味であるが、数多くのギリシア語銘文のなかで、ゼウスをはじめとする各地域の主神、サラピス、サバジオス、地母神などのエピセツトとして、またテオス（「神」）・ヒュプシストスという独立の神格として登場する。研究史上では、ヒュプシストスは（上記 North 論文で触れた）異教における一神教的要素と結びつけられてきた。また七〇人訳聖書でヤハウエを表現するのに用いられたことから、ヒュプシストスと名付けられた神の崇拝をユダヤ教徒の一分派と関連づける研究者も存在する。しかし Belayche は、これらの研究動向を批判し、ヒュプシストスはあくまで異教の神々のためのエピセツトであり、神々の権能と立場を称揚し高める役割を果たしたに過ぎなかったと主張する。ヒュプシストス神にたいする一神教的性質ゆえの特別な儀礼を想定する研究者もいるが、Belayche の立場からはこの説も当然否定される。ヒュプシストスとそれに関連した異教的一神教の研究は現在でも盛んであり、最新の研究動向は本論文の末尾にある Belayche による後記、また Mitchell and van Nuffelen, ed. (2010) : *One God, Pagan Monotheism in the*

Roman Empire で確認できる。

最後に、Bendlin 論文（第6論文）。これは、70 ページを超える本書で最大の論文である。Bendlin は、紀元2世紀から3世紀のいわゆる第2次ソフィスト運動期の帝国東方のギリシア語圏を対象に、当時のエリート層がアポロンなどの聖所でおこなわれた神託をどのように捉えていたかを考察する。Bendlin が依拠する史料は、ギリシア語銘文、アフロディシアスのアレクサンドロスなどの哲学書、ルキアノスなどの文学作品と多岐にわたる。それに伴って、扱われるテーマも碑文慣習、決定論をめぐるエリート層の対応、ローマ期における聖域の盛衰、皇帝による聖域への関与等々、非常に幅広いが、Bendlin の主張の根幹は、第2次ソフィスト運動期における神託の再興を、同時期にみられる「過去への回帰」の文脈に位置づける、というものである。つまり、哲学者でもあり同時に伝統的宗教の神官職もつとめていた地方のエリート層には、一方でエピクロス主義的な立場から神託を批判し、決定論と神々への恐怖から人類を解放すべきとする者もいたが、他方で、神託が頻繁に求められていた古のギリシア世界に倣い、過去の文化的、宗教的遺産を帝国の時代に再生させようとする者も数多く存在したのである。本論文の後記も論文発表後の研究動向を紹介し有用だが、特にルキアノスの解釈に関して史料批判の原則を強調するくだりは興味深い。